



 旅行の事例②

## 郷土愛、12年ぶりに訪れる徳之島へ 最後になるかもしれない同窓会

脳出血の発作から8年。以来、どこに行こうという目的もなく、ただ不自由になってしまった体を少しでも良くするために、毎日リハビリを頑張る日々。

そんなある日、一通の知らせが届いた。「最後の同窓会」の招待状だ。

これが最後になるのなら、何が何でも行きたい。神戸から遠く離れた徳之島に、友人に会いに行きたい。

そんな思いから始まった今回の旅。12年前に行った徳之島と今回は違う。今は、要介護4の身体になり、立位をとることは何とか出来るが歩行は難しい。車いすの移動以外にも多くの介助が必要になる。勝手知ったる故郷徳之島行きも、自分で何でも出来た時と違い、今では大きな不安がある。だから、半ば無理だろうと諦めていた。

ケアマネジャー様からしゃらく旅倶楽部

のことを耳にされ、連絡を頂いた。電話の向こうの声からは、希望と不安の入り混じっていることが容易にわかる。帰りたい、でも本当に帰れるのか…。そんな気持ちを察した私は、はっきり「帰れます」と伝え、お客様のもとに足を運んだ。

準備は数カ月前から始まった。ご本人様やケアマネジャー、理学療法士との打合せを重ね、現地のエレベーターから部屋、お風呂にトイレの状況の把握を行い、時間をかけながらお客様の不安を一つずつ減らしていく。

出発の日は雲一つない晴天。不安はある。それを押し殺しつつ、介護タクシーで伊丹空港に向かう。空港到着後も車いすの乗換えや飛行機の座席への移動など、乗り越えなければならないハードルはいくつも存在する。それを越えて無事に徳之島





空港に到着したとき、お客様の無言ながら最高の笑顔を私は見逃さなかった。ホテルまでの道中、徳之島という土地のこと、昔と今の違いなど、途切れることなく語ってください。自分が生まれ育った町への懐かしさ、愛おしさが十分すぎるほど伝わってくる。

同級生が経営するホテル。そこには既に多くの学友が集まっていた。前夜ながら、その場はすでに同窓会。何十人もの学友が歩み寄り、握手を交わし、昔話に花を咲かせる。

80歳になった同級生たち。しかし、まるで高校生が集まったかのような若々しい熱気が絡まり合い、会場全体を包み込む。皆が皆、徳之島を愛し、友情を大切に、一人一人への思いやりを積み重ねてきた結果がこの場にあるのだ——本来ならば立ち入りを許されない、部外者の私も強く感じた。お客様自身も、ご自宅での様子とは全く違う生き生きとした姿。心が元気になれば、体も元気になれるのだ。

無理だという判断を下すための理由はたくさんある。でもそれは本当に無理なのか。乗り越えることはできるのではないか。事実自分はこうしてここにいる。数々のハードルを越えてきたお客様自身が、強くそんな思いをかみしめているようだった。

エスコートヘルパー 小倉 譲



行程

1日目 同行スタッフがお迎え  
伊丹空港到着  
鹿児島空港を経由し、徳之島へ

2日目 お墓参り  
親戚のご自宅まわりへ  
同窓会への参加(中学)

3日目 友人宅を訪問  
同窓会への参加(高校)

4日目 ホテル出発  
徳之島空港到着  
伊丹空港到着  
介護タクシーにてご自宅へ

メモ

